

「北の縄文を巡る旅」

武居 八千代

先日、いつも通り新聞を読んでいたら、東北縄文の旅の記事が目飛び込んできた。読んでいくと「一般公募します」とあり、主催者は縄文阿久友の会とのこと、早速連絡して申し込んだ。

当日は早朝に八ヶ岳自然文化園に集合、ひたすら東北自動車道を走る。午後4時頃、大湯環状列石に着き、大湯ストーンサークル館を見学。全体に土器は粗雑な感じで、ただ波のような帯の間に磨消縄文が入った晩期の土器が壺型の完形で見られた。縄文が細くてきれいな模様になっていて、私が発掘をやり始めた頃に目にして、なんとすばらしい模様だと思った覚えがある。諏訪地方では破片は出るが、完形はあまり見られない。異形の台付土器もめずらしい。土偶は胸と妊娠線と性器が描かれていて、後期になるとリアルな土偶が出てくる。

ストーンサークル館を出ると、列石群が見えてきた。ボランティアガイドの説明を聞きながら歩いていくと、列石群は環状に内側に一回り、外側にもう一回りめぐっていて、内側と外側との間に有名な日時計なるものがあった。もっと大きいものかと思っていたら、環状にめぐっている広さからすると、意外と小型である。この日時計なるものに東西南北の四隅に丸い石が置いてあるという。この時代の天文学にびっくりする。当時はラジオもテレビもないし、日々見るものといったら空だ。見上げれば夜明けとともに日が昇り、夕方には日が沈み、夜になったら星を見て、いろいろな天文的現象に驚かされたり、受け入れられて暮らしていたのか。



この列石群の墓は縦々横々に環状にめぐっている。ここから 6km 離れた安久谷川から運ばれてきた青緑の石にこだわっているというが、現状はくすんでいて、よくわからない。現在の列石群の状態にするまでの経過は、非常に苦労があったと思われる。川に隣接しているため、当時は土砂災害もあったろうし、これまでに造成工事もしただろう。遺跡の石か、災害で流れてきた石か、判別も難しかったろうし、この状態に復元するということは並大抵の仕事ではなかったと思う。外側の列石群の中には、堀立柱の建物が墓を守っているかのように見える。その先は突然道路にぶつかり、それをわたると、もう一つの同じような石群が見える。なぜ道路があるのだろう。何か譲れないことがあったのか。この道路にも貴重な遺構が会ったのではないかと思われる。これだけの列石群が何代か続いたのか、一時期だけだったのか、近くの集落の人々の墓なのか、特殊な人たちの墓なのかと思いを残しながら、日時計に夕日が入る神秘的な状況を残しながら、墓を後にした。

2 日目は 10 時頃に三内丸山遺跡に着く。この遺跡は平成 4～5 年頃、大きな遺跡が発掘されたと新聞で報道されたもので、縄文ポシエットについても報じられた。現代にもありそうな編物があったのかと感心したのを思い出す。ここではまず、ボランティアガイドと一緒に遺跡を歩く。ここには縄文時代の道路が残されている。普通は家屋の入り口が踏み固められている程度だが、ここでは非常に硬い部分が道路のように続いている。縄文時代の道路があるということもおもしろい。この道路を挟んで大人の墓があるという。縄文時代、大人と子供は別々に埋葬されていた。子供は煮炊きに使った円筒土器に埋葬されていたらしい。さらに進むと、復元家屋がいくつも広がっていた。家屋の中に土で葺いた家屋があり、中に入ってみた。棟が細かく張ってあった。屋根は土と何かとで練ってあるように見える。何のために土の屋根の家を造らなければならなかったのか。茅以外の植物というか、何かと土を混ぜると、冬は暖かくて夏は涼しいとか。それとも、お産をするための特殊な家か。1～2 人くらいしか住めないような、小さめの家である。



次に入った展示施設の中には、幅 50cm・深さ 2m 以上の中にびっしりとした遺物包含層が残されていた。この状態が広大な遺跡に埋まっているということだから、膨大な遺物量であることがうかがえる。これはすごい。長い間の生活痕跡が残っていて、資料としていろいろ解ることだろう。その次に有名な六本柱の復元遺構を見る。その隣りの展示施設には、一部だけ柱の底部を残して、そこまで水を入れた形状で柱穴が残されている。この展示施設を出てふと見上げると、直径 1m はあるだろうか、巨大な栗の木があった。国宝「仮面の女神」が発掘された茅野の中ッ原遺跡にも堀立柱が復元されているが、とてもこれには及ばない。栗の木だって、こんなに太いのは見たことがない。栗も栽培していたという。天まで届きそうなほど高く組み立ててある六本柱の建物にしても、こんなに大きく造られたのは、この集落の社会構造や精神世界の象徴かと思われる。



集落の中心付近には大型堅穴住居が立っていた。復元するのもすごい。学校のような大きさと、集会や儀式など様々な行事をしていたのだろう。中に入ると、端のほうに炉があった。煙の方向を考えたのか、真ん中は市場でも開けそうな空間がある。

やっと縄文時遊館に入る。多数の円筒土器が整然と並んでいるのが目に入る。諏訪地方にも筒型の土器があるが、これだけ長い円筒土器はない。これほど長いと容量もあるだろうし、熱効率も良さそうだ。子供を埋葬するとしてもそのまま入るし、用途の広い土器のように思われる。どんぐりの灰汁抜きではないかとも言われているそうだ。大湯環状列石でも少し見かけたが、東北地方全般に見られる土器のようだ。あまり土質は良くなく、近くに粘土層があるようで、ここで大量に作られたような気がする。とくに土偶は大湯環状列石でも出ていたが、異様な顔で妊娠線が誇張され、性器が特出して異様な形を呈している。当時、子供が生まれる時には母親も亡くなることが多かったのか。こうしたことを思うと、今のような家族構成ではないような気がする。子孫繁栄と豊穡を願っていたのか。漆器製品も見事な器が出ている。作業も分業化されていて、大型家屋でそれぞれが生活に必要な道具を作り、その中で市場を開いていたのか。外から持ってきた道具類もここで物々交換していたのか。

次に黒曜石の石鏃を見た。それが信州の黒曜石だということで、信州の新聞に大きく載ったのを思い出した。黒曜石は近くの北海道でも出るのに、信州とも交易があったとは。陸伝いでは大変だが、船なら海を渡って来られるため、信州の黒曜石出土地の発掘では、ここに市場があったのではないかとされている。こんな遠いところからでも来ていたのだ、すごい。狩りの際に石鏃を槍のように使って殺傷するのは難しく、落とし穴が活躍していたと言われていることから、石鏃を贈答品としても作っていたのだろうか。交易があったとすれば、土器、石器、生活道具、食料品等もあったのではないか。土器・石器だけしか残らないので、土器の模様など造形は違うが表している模様は似ているように見える。石器もよく似ている。土偶の模様は訴える表現を描いているので、リアルな表現も信州の土偶と似ている。それぞれの職人たちが信州と交流していたのか。大型家屋では、こうした人々と酒を酌み交わしていたのか。どんなふうコミュニケーションを取っていたのか。分かち合える動作、手話など、いろいろ想像してみるが、土器の模様として抽象文ではあるが、男、女、動物、は虫類、収穫物等が表されている。蛇、蛙、お産の現象等はそのままと土器の模

様になっているので、その模様には当時の生活状況が表現されているように思える。これが読めるとおもしろいだろう。



午後は国宝合掌土偶の是川縄文館を訪れた。国宝の「合掌土偶」は特別室の特殊ガラスケースに入れてある。国宝「仮面の女神」くらいの大きさで、手は握りこぶしのように合掌して、立て膝で座っている。胸と妊娠線も表され、口も大きく開けて、今にも子供が出てきそうな表情をしている。頭髮も当時の髪型だろうか、尖石の「仮面の女神」とは大変よく似ている。表面にところどころ朱が塗られているように見えるが、発掘された時点では、全体に塗られていたとのこと、掌もしっかり握られて、力強さを感じる。お産をすることがいかに大変だったか、無事に生まれるのを願っていたことであろう。

次の展示室には、三内丸山よりも優れた土器・漆器が見事に黒と赤の光沢を放っていた。その中には大湯環状列石と同じ晩期のきれいな土器がたくさんあった。注口土器もただ土瓶のようではなく、何か意味のあるような隆帯文が見られる。すばらしい形だ。土器にも漆が塗られ、光沢を放っている。こうした土器は火にかけられないため、酒でも入れて注ぎ回していたのか。こんなに丁寧な造ったものは、一般の人たちは使わないように思われる。もう階級社会になっていたのか。現代でもこれほどデザインの良い重みのある作品は、見たことがない。藍胎漆器も光沢を放っていた。権力を表すような異形のすばらしい深鉢土器もある。是川縄文人がこれほど見事な漆器製品を造るとは。信州でも木曽地方で漆器が造られているように、もう村全体がこうしたものを造っていたのではないか。縄文も終わり頃になると、技術も向上して良いものができている。



遮光器土偶は目が大きく、髪型も複雑だ。宇宙人ではないかとも言われているが、私はフクロウではないかと思う。フクロウは首が一回りするが、それが縄文人には奇異に感じられ、村主が大きな目で見回している様子ではないか。展示パネルには人骨が写されていた。普通、酸性土壌では人骨は残らないのに、貴重なものがあって、顔等は頬杖をついた土偶に似ている

考古館を見学していると、ボランティアとして館内で国宝の合掌土偶のレプリカを造っているというおじさんが、土器づくりの部屋に案内してくれた。そこでは4～5人が土器を造っていた。茅野の縄文のビーナスを造っている人もいた。粘土はどこで入手するのかと聞くと、近くの山に粘土の山があるという。やはりそうだなと思った。野焼きは割れずに焼けるそう。茅野市尖石縄文考古館では割れないように苦労しているのに。地元で採れる粘土で造るほうが割れないのではないか。いろいろな条件を考えないといけないが、やっていこうと思う。是川の土器は全体に質が良く、しっかりした出来で、よく磨きがかけて美しい光沢を出している。これだけの優秀な土器を造る人々が縄文時代にいたのだということをあらためて認識させられた。私も土器づくりをさらにがんばらなくては。目標が見つかり、有意義な旅行になった。

翌日は朝7時出発。東北自動車道を走り、家路へ向かう。バスの中では感想を言い合いながら、夕方6時に八ヶ岳自然文化園に着く。充実した日々を過ごし、縄文阿久友の会の方々にはいろいろお世話になった。この旅行を計画された方、会計の方も大変だったと思う。お疲れさまでした。とても楽しかったです。皆様ともお友達になり、共通の話題ができたので、これからもよろしくお願いします。